

冷たい夏

高岡啓次郎



二階のインターネットルームにあるライティングデスクはこれ以上ないくらい乱雑をきわめていた。この部屋だけは誰も立ち入らせたくない。桂木和彦はそれを公言してもいたから妻も娘もよほどのことがないかぎり入ることはない。ブラインドを開けて外を見る。窓からの景色は悪くない。マンションの七階から見下ろす豊平川は、夜闇にまたたく街明かりの下で黒い淵になって、ときおり揺らぐ光を放ちながら横たわっている。

視線を室内に戻した。それにしても、あまりにもひどい。パソコンの後ろにあるコンセントもタコ足になっていて、ちよつとした火花が出ただけで火災になる可能性もあるだろう。そう思つてダストボックスを横において不必要と思われるものをほうりこんでいった。レシートやら、請求書やら、ダイレクトメールやら、用済みのメモなんかでたちまちボックスはいっぱいになる。

そのとき、以前に書いたメモが幾つも出てきた。ちよつとした覚え書きだ。知らない言葉の本やテレビ、誰かとの何気ない会話を通して知つたときに記録しておく。社内報に記事を載せる役目を担っているし、たまに小説めいたものを書いてもある。役立ちそうな思いついたことを忘れないようにする習慣があつた。

従業員が全国で三千人はいる電機会社に勤めて三十年を過ぎた和彦が大学の文学部を出ていることを理由に社内報をまかされて今年で十年になる。最近は何でもスマホにメモする

のだが、黄ばんだ用紙には今でも役に立ちそうな言葉がある。その中の一枚が目がとまった。言葉のニュアンスからして、そう古いものではなさそうだ。

そこに書いてあるのは『ブランケット症候群』という言葉だった。いつ書いたかは思い出せない。これは子ども時代から使っていた毛布や膝かけなどを大人になってからも離せない病的な症状をさす言葉だ。その小さな紙片を見つめているうちに、和彦は一昨年に亡くなった知人のことを思い出して独りごとをつぶやいた。

朝倉次郎——あの死に様はまさにそうだったのではないだろうか。そうは言っても彼の場合は幼少時代の何かを引きずっていたというのとは違う。ずっと後年になってから。おそらく八年くらい前からの心の糸がたぐり寄せていた感情ではなかったか。そう思い当たる記憶が和彦にはあつた。

札幌市内の同人誌に所属している和彦だったが、文学仲間である佐伯義則から異変を知らせる電話があつた。正確に言えば一年三ヶ月前の日曜日。午前中のことだつたと思う。佐伯は高校時代からの数少ない友人であり、札幌では伝統がある同人誌に誘ってくれたのも彼だつた。頭のいいやつで、すんなりと一流大学に入り、道庁の出世コースに乗ったエリート公務員だが、それを鼻にかけることはない。話の内容は仲間の安否に関することだつた。

「桂木はこのごろ朝倉さんと連絡を取り合ってるかい？」
「いや、最近はずっと無沙汰している。仕事がとりこんでい

て文学の集まりにも出ていないしね。朝倉さんがどうかしたのかい？」

「なんか変なんだよ。何回かけても電話に出ないし、メールしてもまったく応答がないんだ。検査入院中の代表に頼まれて連絡しているんだが」

「仲間の誰か知らないのかな」

「何人かには聞いてみたけど分からないらしい。最近は何とも交流を持っていなかったみたいだな。去年から作品も出していない。あの人は独り暮らしだから心配だ。倒れて動けなくなっているなんてことはないかなと思つてさ」

「朝倉さんは幾つになるだろう」

「俺らとそう変わらないんじゃないか。二、三歳は上かもな。六十代前半だと思う」

「あの人、もう仕事はしていないよね？」

「地方紙の下請けみたいな会社にいたらしいね。そこが定年前に倒産して、それから細々とアルバイトをしていたみたいだ。頭のいい人だから翻訳みたいのもしていたよ。金になつていたかどうかは分からないけど」

「そうなのか。じゃあ行ってみようか。以前に何回か完成した同人誌を届けたことがある。宮ノ森にあるアパートだつたけど、家は変わらないよね」

「そのはずだ。じゃあ、これから昼飯を食ったら迎えに行くから一緒に付き合つてくれ。もしものために一人より二人の方がいい。休みの日に悪いけどさ」

「なんもだよ。それを聞いたら心配になつてきた」

その日は日曜日だったので和彦は昼近くまで疲れた体を横たえていた。残業が続いていて疲労がピークにきている。急いで服を着て朝昼兼用でトーストを二枚たいらげた。買い物好きな妻と娘は朝から清田にある三井アウトレットに出かけている。そのあととは近くにあるコストコにも立ち寄るといふから半日は帰つて来ない。今日は一人でのんびりと溜まつた録画を観ようと思つていたが、それは後回しでいい。

佐伯の家は同じ豊平川沿いの少し上流にある一戸建てだ。お互いに忙しい立場だが、こうしたときに誘つてくれたのは嬉しい。それにしても、佐伯が言つたものために二人の方がいいという言葉が気になつた。何か不測の事態でも起きているのだろうか。何となく胸騒ぎがする。だから佐伯も電話をかけてきたのだろう。

こうして二人で駆けつけたのだつた。あれは近くにある藻岩山に初雪が降つた日で、札幌の街はみぞれ混じりの冷たい雨がアスファルトを濡らしていた。宮の森にある駆けつけたアパートは周囲の整理された住宅地からはじき出されたみだいな場所にある。立派なマンションや一戸建ての家々が並ぶ中に、異質とも言えるほど老朽化が進んだ建物が三棟ほどあって、そのひとつに朝倉次郎はいるはずだつた。屋根や鉄の階段は以前にも増して赤錆におおわれ、モルタルの壁は一部が剥がれ落ちていた。和彦は以前に来たときの記憶があいま

いだつた。

「あれ、どこだつたかな」

「朝倉の住まいは真ん中の棟の二階だよ」

佐伯は指をさして先に階段を上がった。夏に立ち寄つたところがあるという。粗末な木の板に名前はあつた。

「カーテンは閉じられているね。隙間からも見えない」

和彦が言うと、佐伯も同じように覗いた。

「呼び鈴もこわれているぞ。まったく音がしない」

このあと二人してドアや窓を叩いたが、反応がなかった。

「妙だよな。隣は空き部屋みたいだから下の住人に聞いてみるか」

そう言つて佐伯は降りていった。和彦は不安が一気に高まつてきた。ドアポケットに鼻を近づける。郵便物や宣伝のビラなんかがつまつていて中が見えない。五分くらいで佐伯が戻つてきた。

「近くにいる家主の場所を聞いたよ。同人誌と名刺を見せてら信用してくれるだろう。事情を説明して開けてもらおう」

「その方がいいね」

佐伯の言うとおり、最初はいぶかしそうにしていた家主も佐伯の勤め先が道庁であることと、朝倉次郎と佐伯の名前が載つた同人誌を見て信用してくれたようだ。そのあと家主も一緒に三人で玄関に入ると生ゴミが腐敗したような匂いがした。息を止めて部屋に通じる引き戸を開ける。三人は同時に悲鳴に近い声を上げた。

朝倉次郎は居間に敷きっぱなしになっていた布団の横にあるローテーブルの上に乗っかかろうとして絶命していた。左手でマフラーを抱きしめ、右手の二本の指を口に入れていた。食べ残したと思われるものが撒だらけになってテーブルや薄汚れた絨毯の上に散乱していた。

「大変なことになったな」

和彦と佐伯は同じ言葉をはいて動転していたが家主は落ち着いていた。カーテンを引き、窓を開けて新鮮な空気を入れながら、長年にわたってアパートを経営しているから、こうしたことはときどきあるのだという。自殺されたらまずいけれど、病死なら問題ないのだと顔色も変えずに言うのが和彦には不快だった。すでに死後硬直がすすんでいたのは素人目にも明らかだった。眼が見開き、指を突っ込んだ口も固まったまま絶望に満ちた表情でゆがんでいる。

すぐに佐伯が警察に知らせたが、それと同時に三人は部屋から外に出た。死因がはつきりするまで遺体に触れたり、部屋にある物を動かしたりすることが許されないのは全員が承知していたのだ。二十分ほどしてパトカーが二台やってきた。サイレンに続いて鉄の階段が大勢が上がるときの、けたたましい音が辺りに響いた。そのためか、近所の人があちこちから出て来た。

第一発見者である二人は状況を聞かれ、ありのままにいきさつを話した。文学の交友以外には多くを知らない。親戚関係も聞いたことはない。ただ、朝倉次郎が書いたものから、

本人がかなり昔に離婚したこと。生き別れた娘さんがいるらしいことは知っていた。お互いの生活を詮索しないのが暗黙の礼儀みたいなものだったから、簡単な情報を伝えるのがせいぜいだった。

そばで聞いていたら、家主もまた多くを知らないようだった。入居するときは会社が保証してくれたが、倒産してからは保証人は誰もいないという。それでも家賃はたまに遅れることはあったが、毎月きちんと払ってくれていたと家主は言った。賃貸料は安くて月に二万五千円だという。風呂もないから近くの銭湯に出かけていたはずだと家主は言った。

再び和彦たちが部屋に入ることは許されなかった。事件性の有無がはつきりするまでは当然なのだろう。一週間ほどあから佐伯が電話をくれた。

「死因は食べ物を喉につまらせたまま呼吸困難におちいつて死亡したみたいだ。あの家主のやろう、自殺でなくてよかつたと安心していたわ。感じの悪いやつだ」

「むかつくね。呼吸不全か。それで指を口に入れていたんだ。苦しかっただろうな」

「独り暮らしは怖いな。気の毒なことだ」

「遺体の引き取りはどうなっただろう」

「俺も又聞きだけど、旭川から娘さん夫婦が来てすべての処理にあたったみたいだよ。別の日に中の家財やら持ち物やら、ほとんどすべてが業者によって処分された」

「そうなのか。仕方がないよね」

「それで、処分の日を家主に教えてもらって、俺と何人かが来てみたんだ。朝倉さんが残した作品とかを引き取れないかと思つてさ」

「それで、どうだった？」

「段ボールに一箱だけもらえたよ。どうせ捨てるからつて渡してくれた」

「中には何か変わったものでもあるのかな」

「俺もまだちゃんと見ていないんだ。彼の作品が載つた本と原稿用紙だけを詰め込んできた」

佐伯とやりとりしたあと、和彦は出張の用意に忙しくとりかかった。明日からは仙台の工場に新製品の勉強に行かねばならない。

それから一年三ヶ月が過ぎたが、和彦はずっと仕事に没頭していた。広報に載せる記事はときどき書いていたが小説は短いのを少ししか書いていない。そのあいだ、亡くなつた朝倉次郎のこともほとんど忘れかけていた。そのことが胸の奥をかすかに突き上げる。自分が同人に参加させてもらつたころは親しく話をしたし、例会のあとには一緒にコーヒーを飲んだことも数回ある。たまに家を訪ねて楽しく会話もしていたのだ。

それなのに何年も疎遠になつていたことに心が痛む。『ブランドケット症候群』と書かれたメモ用紙を見つけたことがきっかけで、急に朝倉次郎のことが鮮明に心に刺さつてきた。

亡くなつたあととも一時は心に哀しみを抱いてはいたものの、いくらししないで考えることもなくなつていた。

ここにきて和彦は胸に手を当てる。自分は大事な何かを見落とし、仲間として当然考えるべきことを怠つてきたのではないか——。あの日、朝倉次郎がしがみつこうようにして抱きしめていたものが悪夢の再現みたいに思い出された。それは、太いニットで編んだグレーのマフラーなのだが、彼がいつも肌身離さず首に巻きつけていたのを和彦は覚えていた。

最初にそれを見かけたのは八年くらい前だったから、たぶん朝倉次郎は五十代のなかばくらい年齢だったろう。そのときは八十代の母親と二人暮らした。和彦は一度だけ見かけたことがある。母親がデイサービスでいないとき、和彦が代表に頼まれて完成した同人誌を届けに行ったことがある。夏の終わり頃だった。その年は冷夏のために北海道の作物は打撃を受けていた。

訪ねてくれたことが嬉しかったとみえて、家が上がつてくれという。朝倉次郎は慣れた手つきでお茶をいれてくれた。作品の話でかなり盛り上がつて一時間はいたと思う。その間もずっと朝倉次郎はニットのマフラーを離さなかつた。例年より冷たい夏だったせいもあるだろう。

「来週の土曜の午後に北口のエスプラザで完成した同人誌の合評会をやるんです。朝倉さんも来ませんか」

「それは楽しみだ。行かせてもらうよ。札幌駅の北口にある多目的ホールだよ」

「そうです。よかつたら迎えに来ましようか」
「電車があるから大丈夫。桂木さんみたいに忙しい人に来てもらうには及びません」

和彦はけつして社交辞令で言つたのではなかつた。そのころは仲間に親切にしたいという気づかいを少しは持つていたのだ。そうした気持が通じたのか、心から喜んでくれたのは嬉しかった。けつして社交的とはいえない朝倉次郎がそうした反応を見せるのは珍しいことを和彦はあとから知つた。

その日が来たとき、朝倉次郎は髪をととのえ、きれいに髭をそり、ストライプが入つたワイシャツに麻生地地の涼しそうなブレザーをひつつかけ、きちんとアイロンがかかつた紺色のパンツ姿で現れた。しかも例のマフラーを首に巻き付けている。お盆が過ぎたとはいつてもまだ八月だから寒くはないはずだが、冷たい夏は早い秋へとひとあし先に踏み込んでいたのかも知れない。それにしてもグレーのマフラーはよく似合つていた。何人かの婦人会員がそれを見てひやかした。

「なんか、朝倉さん若くなりましたね」

「ほんと。さつき私、一瞬だけど誰かなと思つた。朝倉さんだつたのね。まあ、お久しぶり」

「どなたか、いい人ができたのかしら」

二時間ほどで作品の合評は終わった。朝倉次郎も要所で発言したが、さまざまな作家の作風と細かく比べるあたりがペダンチックな感じがした。それでも終始上機嫌で、婦人会員たちからの受けはよかつた。和彦が合評会で顔を合わせたの

はこのときが最初だつた。帰りの方向が一緒だつたので、ついで和彦はからかいたくなり、痩せた朝倉の首に巻きついていたマフラーの先をつまんで言つた。

「これは誰かの贈り物ですね？」

「そう見えますか」

「もしかして娘さん？ 朝倉さんの作品に何度か出てきましたよね」

「いえ、違います。実はかなり昔に離婚しましてね。娘は別れた女房が育ててくれて、もう二十歳をとつくに過ぎましたが行き来していません」

「ごめんなさい。変なことを聞いてしまつて」

「別にかまいませんよ。それで今は母親と暮らしているわけです。このマフラーは母のために来てくれてるヘルパーさんからもらつたものです」

「へー、お母さんの所に来てるヘルパーさんが？ さては何かあつたんですね。小説的な何かが」

朝倉ははにかみながら黙つていた。しかし聞かれたことが不快だつたという反応ではない。どこか照れくさそうな微笑を浮かべている。週に二回ほど掃除や炊事に来てくれる若い女性らしい。年齢は朝倉より二十歳は若いという。ときどき会話を交わすうちに親しくなつて、そのうち母親だけでなく次郎にまで贈り物をしてくれるようになったというのだ。

「きつと、きれいな人なんでしょうね？」

「そうでもないよ。普通でしよう」

「誰に似ていますか。芸能人で言えば」

「そうだねえ。北川景子かな」

「めちゃくちゃ美人じゃないですか」

二人は笑った。こんなに楽しそうな朝倉次郎を見たのは後にも先にもこのときだけだった。当初は単なる淡い憧れみたいな感情だろうと思っていたのだが妙な場面を見たことがあった。和彦が別の用事で朝倉のアパートを訪ねたとき、部屋から若い女性が出て来た。まさしく北川景子に似た人だ。和彦は階段まで二十メートルを切るくらい距離にいたのだが、そのまま彼女が行き過ぎるのを見ていた。それはちよつとした好奇心からくるもので、特別の意味はない。

そのあと、すぐに二階の部屋から朝倉次郎が出て来た。視線はさつき降りてきた女性の方向にあり、急ぎ足で階段を下りてから女性を追いかけるように早足で歩いて行つた。女性が交差点の赤信号で止まると、朝倉もまた追いかけるのを中断して離れた場所ですまっている。和彦は直感で気がついた。明らかに朝倉は好意を抱いた女性ヘルパーの後を付けているように見受けられたのだつた。

和彦はなぜか、そのままではまずいことが起こりそうな気がしたので、立ち止まっている朝倉次郎に近づいて声をかけた。すると、驚いた表情を見せたあと、悪いことをしているときに人がしばしば見せるバツが悪そうな、迷惑そうな顔になつたのである。「何か用事ですか」と朝倉次郎はぶつきらぼうに言った。そのときも視線は和彦から泳いで交差点の向

こうにそがれていた。

「同人誌のゲラ刷りを持ってきたんです」

「そうですね。ポストに入れておいてくれませんか」

礼も言わずに朝倉次郎は小走りで女性の行つた先に向かつていった。その方向にはバス停があり、もしかしたらヘルパーがそこから乗るのかもしれないと和彦は思った。確かめてみたい気持ちに動かされて朝倉次郎の行つた方向に歩くと、まさしくその通りだった。ちょうどバスが来て、女性はそれに乗車するところだった。驚いたのは少しあとに朝倉次郎もバスに乗り込んだことだった。

少し戻つてゲラ刷りを二階のドアポケットに入れた。階段を下りながら首をひねる。いったい何のためにヘルパーの後をつけるのか。忘れ物を届けるのとは明らかに違う。他に何か正当な理由があるのだろうかと思つたが、あまり好ましくない印象を持った。それがまぎれもないストーカー行為につながる気がしたからだつた。

しかし、それほど親しいわけでない文学仲間の私生活に関わるほど和彦もひまな人間ではなかった。仕事での責任が増えて、歳月は恐ろしく速いスピードで過ぎて行つたのだ。朝倉の奇異な行為を気になげながらも、いつしか記憶の柵からどこかへ行つてしまった。それに、あれからかなりの年月が過ぎて、母親は亡くなつてもう数年は経っていると聞く。あの若い美人ヘルパーが彼の家を訪ねる理由はなくなつてははずだ。

それとも、なんらかの個人的な接触を続けていたのだろうか。あの死にざま。死ぬまで離さなかったマフラーが和彦の頭から離れなくなった。仕事をしていても、ふとした瞬間に思い出す。そういうえば、と和彦は思った。朝倉の家財が処分される時、原稿が入っている段ボールを一つだけ業者が渡してくれたと佐伯は話していた。あの中には何が入っていたのだろうか。和彦は夜の九時をまわっていたが、知りたい気持ちを抑えられずに電話を入れてみた。

「遅い時間にすまないね。実はここ数日、朝倉さんのことがひどく気になってね。何か書きかけのものを残していたみたいだと佐伯は前に話していたよね。内容は分かったのかな」
「今ごろどうしたの。まあいいや。中は一応ざっと見てみたらよ。今まで発表したものがほとんどだが、未完成になつている長ものがひとつある」

「それは小説なのか」

「いや、日記みたいな、手記と言った方がいいのかな。事実を書いてあるのかもしれない。俺も忙しくて少ししか読んでない。原稿で一五〇枚くらいだ」

「かなりだね。それを見せてほしいな」

「ああ、いいよ。桂木の家のドアポケットに入れておくから。明日の朝なら寄れると思う」

「すまないね。多忙な道庁職員をやば用で使ってしまった」

「よせよ。どうせ通り道じゃないか。読んであげたら故人も喜ぶと思うよ。俺は彼の作品にあまり惹かれたことはないか

ら、たぶん、これ以上は読まないけど。なにせ広報の仕事についているから読まなくてはいけないものがごっそりあるんだわ」

「うんうん、わかるよ。俺が読んだら内容を説明するよ。気になる点があれば」

「ああ、頼むね。じゃあ明日」

その夜は疲れがどつと出て早くベッドに入った。冷たくて暗い闇には霧が流れているような気がした。心が重く、何もしたくないまま眠りについた。

翌日は仕事の最中でも朝倉次郎のことがよぎった。和彦はそれを早く読みたい衝動に駆られ、夕方の五時になるとすぐに会社を出た。苗穂にある事務所から山鼻の自宅までは車でそんなにかからない。帰宅すると、「あら、早いね」と妻が意外そうな顔をした。口角を少し上げたが嬉しいという顔ではない。普段は帰りが遅いし土日も家にいることは少ない。そんな生活が慣れていて心地いいのだろうか。

「今日も遅くなると思っていたから何にも用意してないの。私ひとりだから冷蔵庫に残ったものを適当に食べようと思つてた」

「俺もそれでいいよ。佐伯から何か届いてるだろう」

「ええ、あなたが家を出てすぐくらいに届けてくれたみたいですよ。何ですか？」

「一昨年に亡くなった朝倉さんの原稿だよ。これを読みた

て早く帰ってきた。食事は簡単なものでいいからインターネットルームに持ってきてくれないか。いつでもいいから」

「レトルトカレーでよければすぐにできるわよ」

「それでいい」

そう言って和彦は着替えてからすぐに朝倉の原稿を開いた。それは一人称で書かれていたが、あらゆる点で朝倉次郎の身辺について記したもののようだった。どうやらノンフィクションの作品ではないかと思われた。題名は『愛しき人へ』となっており、著者だけでなく朝倉の母親も実名で出てくる。ヘルパーの名前だけは仮名となっていた。

夜が更けるまでに一気に読み進んだ。全編を通して新井山あすかという三十代の女性が朝倉家に来ていた三年間のことが書かれている。随所に日付が入っていることを考えると、朝倉はずっと日記を付けていた可能性がある。それは部屋のどこかにあったのかもしれないが、業者によって処分されたと思われる。佐伯たちが受け取ったものに日記があったとは聞いていない。

そこには新井山あすかへの賛辞が綴られていた。いかに誠実に仕事をこなし、心のもったヘルパーとしての仕事をしてくれていたか。細やかな気づかい。責任感や思いやりについて細かく記していた。ところどころで母親と息子である朝倉次郎が抱いていた深い感謝の思いが綴られていた。手編みのマフラーが彼女からプレゼントされたいきさつも書いてある。母親には少し短めでピンクのものを。グレーの長いもの

は介護される対象ではない朝倉次郎のために編まれたことが記されていた。

母親が亡くなつてからも朝倉と彼女の交友は続いたようだ。不幸な結婚をしている新井山あすかは朝倉に何でも相談するようになり、やがて暴力的な夫とは別れて朝倉次郎が住んでいる同じアパートに引っ越して来たこと。やがて二人は支え合う関係になり、新井山あすかは朝倉次郎の部屋を掃除したり、食事を作ったりするようになって半同棲生活と言つてもいいほどの仲になつたとある。

しかし、手記の最終章には哀しい結末が記されていた。新井山あすかが、別れた夫のところに置いてきた子どもへの思慕がつつて精神的に鬱状態になり、とりわけ夫が子どもを世話しきれなくなつて年老いた両親にあずけて別の女と逃げたということを知ると、突然行方をくらましたこと。心当たりを探し回つたが見つけられないまま今日に至つておつた。

手記の最後には一遍の詩が美しい字体で書かれていて、『愛しき人へ』という言葉で手記は終わつていた。

浜辺に咲いた紫の涙 はかない花びらはまぼろし
憂いの顔を潮風に染めて 暮れゆくひとときを彩る
冷たい夏は今日も通り雨 きつとお前も震えている
思い出を結んだ恋の花 誰かのぬくもりで濡れている
哀しみを紡いだ絹の色 誰かが愛しくて星を見ている

和彦は手記を読んで心が熱くなった。朝倉次郎という独りの男が、生涯の終わりに誰かを愛し、それが実らなかつたにせよ、その人の幸せを強く願っていたことが痛々しいほどに胸を締め付けるのだ。この女性は今どうしているだろう。不幸な結婚のすえに愛児とも引き離され、その強い母性愛の苦しみの中で朝倉という男を愛してくれていたのだろうか。

新井山あすかを探し出そうと和彦が思ったのはそのときだった。本名はすぐに分かった。本条さおりという人だ。特徴から言って間違いない。勤めていた職場にはすでにいなかった。今は室蘭にいたという情報もつかんだ。同じヘルパー仲間からおおよその住所を聞き出すことにも成功した。八丁平という高台にある介護施設で働いていることを知ったときには、次の日曜日を空けておいた。買って間もない車で長距離を乗るのも悪くないだろうと思つた。

暦は三月に入っていて、急速に雪解けが始まっていた。やがて春のいぶきが再び大地をおおうことだろう。電気とガソリン併用のエコカーはエンジン音もせずに滑るようにアスファルトをとらえた。札幌から高速に入つて一時間ほどで室蘭市内に入った。ナビをつけて八丁平に向かう。数件の介護施設を訪ねて歩き、三軒目に彼女がいることをつきとめた。和彦は自身の名刺と、朝倉次郎が残した手記を見せて「これをお見せしたいので」と話して近くの住まいにたどりつくこと

ができた。

意外にも、本条さおりは室蘭の街を見下ろせる場所に立派な家をかまえていた。誰か富裕な人と再婚でもしたのだろうか。そう思つてインターホンを押す。名前は本条のままだ。中から透明で品のいい声が出た。事情を説明するとすぐに本人が出て来てくれた。いつか朝倉次郎の家の前で見かけた女性に違いなかつた。雰囲気は八年前に見かけたころとかなり変わつていて、ほっそりしていた顔立ちには肉がつき、中年の女に共通している落ち着きと、俗事にまみれたやつれのよなものが見られた。

朝倉次郎が亡くなったことは知らなかつた。残した手記の話をする、すぐに和彦を家の中に招き入れてくれた。自分が同人仲間であることを説明し、亡くなったときのいきさつに触れたが、それほど深い悲しみを表すことはなかつた。ひととおり話し終えると、本条さおりは困惑顔で語り出した。

「あのマフラーは朝倉さんのお母さまにあげたものです。それが、いつのまにか息子さんがするようになって。いないときにお母さまが話していました。それを俺にくれないか何回もせびられて負けてしまったのだと。ごめんなさいねと平謝りされるので、私はぜんぜんかまいませんよ。また編んであげますね。こんどはピンクの色にしましょうか。それならほしいとは言わないでしょうから。そう言つたんです。二人で大笑いしました。翌月には編み上げて差し上げました」

「そうだったのですか。では手記の中であなたに関して、あ

の人は不孝な人だ。旦那はひどい酒飲みで暴力をはたらく。何回も逃げ出そうとしたが、そのたびにかぎつけられ、自分だけならまだしも、みせしめに子どもを虐待するから逃げ出せずにいる。だから何とかして助けてあげたいと書いています。一部を読んでいいですか」

「はい、お願いします」

本条さおりは不安そうな表情を浮かべて聞き入っていた。

その日は母の具合が悪く、新井山あすかさんは仕事を終えて帰宅する時間になっても寝汗をかいている母の肌着を取り替えてくれたり、体調を調べて病院を探してくれたりした。ぼくは遅くなったことが心配で、また気難しい旦那さんに叱られるのではないかと、気になって行って行った。どうなるものでもないのはわかっていたが、見届けたかった。すると案の定、顔を真っ赤にした旦那が家の外で待ち構えていて、「遅いじゃないか。どこへ行って来たんだ。一人なのか。誰か男に送ってもらったんじゃないのか」

などと矢継ぎ早に問い詰めた。

「大声を出すのはやめて」

新井山あすかさんは泣き顔になって訴えた。

「具合の悪いお客様を放っておけなくて余分にお手伝いしてきたのです。あなたが心配するようなことはありません」

「嘘をつくな。俺にはわかっているんだ。お前には前から男がいるだろう。さあ言え。誰だ。どこへ行っていた？」

聞いていたぼくは耐えられなくなった。とうとう物陰から出て、この人は母の世話を余分にしてくれていたのだと言った。すると、「誰だお前は」と旦那はひどく激高してぼくを睨み付けた。

「私は母がヘルプを受けている朝倉です。母の体調がおもわしくないので、個人的な時間を使って世話をしてくれました」

「なんで女房に付いて来る？」

「心配で様子を見に来ました」

「心配だと？ 余計な世話もいいところだ。関係ない人に心配される筋合いはない。さつさと帰れ。それとも何か。最近なんかこいつに男の影を感じるのはお前のせいか」

「めつそうもありません。帰ります」

そんなわけでとりつく島がなかった。ぼくは帰宅したが、新井山あすかさんのことが心配でたまらなかった。別の日、とうとう彼女は家を飛び出してしまった。ぼくは大家さんに頼んで、同じアパートの空き部屋に入居できるよう助けた。

旦那さんとは離婚に向けて弁護士を立てたという。それからぼくにとつて嬉しい日が続いた。なんとと言っても、大好きな人が同じ屋根の下にいるだから。ぼくがずっと前から願っていた生活がやっと訪れたのだ。

読み終わると、本条さおりは視線をそらしたままで何度もため息をついた。何かを逡巡するように首を上げたり、うなだれたりしている。

それから姿勢を正してこう言ったのだ。

「そんなことはありません。私の主人はお酒を飲まない人ですし、真面目で優しい人です。殴られたことなんて一度もありませんよ。子どもはもうすぐ学校から帰ってきます。どうして朝倉さんがそんなふうに使われたのか私には理解できません」

「え？ そんなんですか。あなたのお名前だけが仮名で書かれていますか、あとは全部実名で、日付まで入っていますか」

「まったく事実とは違いますよ。朝倉さんは小説としてお書きになったんじゃないやありませんか。私は家を飛び出して朝倉さんと同じアパートに引っ越したことはありませんし、まして半同棲生活をしたなんて、あり得ないことです。はつきり言って、とても迷惑です。まさか何かに載せるなんてことはありませんですよ」

「それはいいです。本条さんのお話を聞いていたら当然ながら封印すべきものだと思います。でも、私は一度だけ、たまたま用事があったて近くまで行ったときに見かけたのですが、朝倉さんが本条さんのことを心配して、あなたが帰るあとを

追って行ったことがあるようですが」

「そうなんです。何度もありました。私は怖くてたまらず、何回目かのときに主人に話したんです。そうしたら、普段は温和な人なのに激怒して、一度、外で待ち構えて怒鳴りつけたことがあります。やめないと警察に言うぞと警告してからは追いかけて来ることはなくなりました。私は上司に話をして担当を変えてもらったんです」

和彦は絶句した。ここまで来たことが急に恥ずかしくなつた。なんともやるせない思いで新井山家を出て再び高速に入つて帰宅した。このまま自宅に入る気になれず、車をそのまま宮の森に向けた。朝倉次郎が住んでいたアパートの前まで来て停車し、すぐに佐伯に報告すると、昼から酒でも呑んでいたのか笑いころげんばかりの反応が帰ってきた。

「だからさ。小説を志す人間は妄想のかたまりなんだろうな。それを芸術的なセンスを持った人だけが、優れた作品にできるんだよ」

「確かにそうかもな。でもさ。なんかやるせないよ。朝倉さんは本気で彼女に惚れたんだと思う。最後に書いてある詩なんか、なかなかのものだよ。考え込まれた言葉が並んでいる。純愛だったのかもしれない。きつとそうだ」

「へー、俺はそこまで読んでいないからな。どんな詩なんだ？ ちよつと読んでみてくれないか」

和彦がスマホを口に当てて朗読すると、またまた佐伯は笑いが止まらずに言った。

「これはサザンの歌じゃないか。バクリだよ」

「サザンって、サザンオールスターズのことか？」

「そうだよ。誰でも知っている曲だ。桑田佳祐が創った『冷たい夏』の一部さ」

「そうなのか？」

「間違いない。車の中でしょっちゅう聴いているから」

「俺は知らなかった。でもパクったというより、詩を引用したんだろう」

「まあ、朝倉さんのためにはそう考えてあげた方がいいんだろうな。それにしても、どうして実名で書いたのかな。小説として書いたらそれなりに面白い作品になったかもしれないのに。桂木もご苦労なことだったな。わざわざ室蘭まで出かけてさ。でも、よかつたじゃないか。美人に会えて」

「いや、かなり変わっていた」

「歳月は仕方がない。でも無駄には終わらないと思うよ。こんどはお前がこれを材料にして小説にしたらいんじゃないか。楽しみにしてるよ。じゃあな。喋っているうちに肉を食いつばぐれてしまう」

「この手記はどうしたらいい？」

「桂木が持つてりゃいいよ。こんなの娘さんには渡せないだろうさ」

「だよな」

和彦は全身から力が抜ける気がした。それは単なる疲れとも違う。書くことがいやになりそうな、そんな脱力感だった。

スマホを検索し、サザンの『冷たい夏』をYouTubeでかけてみた。聴いたことがある。美しい曲だ。なぜか涙が出た。人との関わり合いが苦手だった朝倉次郎が、本気で母親の介護に来ていた人妻に惚れたのだ。

車を降りて階段を上がる。乾いた鉄の音が侘しさをのらせる。その部屋は誰も入っていなかった。窓に夕陽が当たり部屋の中も赤く染まっている。反射してよくは見えないが、がらんとした古い室内は何事もなかったみたいに静まり返っている。

瘦せて背中がうなだれたみたいに丸くなりかけていた朝倉次郎の姿が浮かぶ。母親を亡くしてから、一人暮らしの部屋は寒々しく、少ない収入で節約を余儀なくされていたせいか、冬でも部屋の暖房を使わずコタツに入っていることが多かったという。

和彦は目を閉じて朝倉次郎の冥福を祈った。その心からの弔意は亡くなつてから初めてと言つていいほど深いものだった。——孤独だったのだ。もっと親しくしていればよかった。力になれることもあつただろうに。

そんなことを考えながら階段を降りた。下に降りると老婆がひとり立って和彦をいぶかしそうに見ていた。右手に草刈り鎌を持つている。

「あなた、なんか用かい？」

ずっと覗いていたから不審者か何かと思われたのかもしれない。

「いえ、上に住んでいた朝倉さんのことを思い出したものですから、つい懐かしくて」

「ああ、そうなの。あれから一年以上になるのに誰も入らないわ。それにしても気の毒にね。まだ若かったのに。あの人のおつかさんとは仲良しだったんだ。旅行なんかも何回も行った。寂しいよ。息子さんのことをいつも心配してた。私がいなくなったら誰が世話してくれるだろうってね」

「お母さんが亡くなられてからは、さぞかし寂しい生活をされていたんでしょうね」

「そんなことはないと思うよ。よく女の人が来ていたもの。かいがいしく世話をやいていたね。私はつきり再婚するかと思つていただけ」

「え？ 女の人ですか。どんな感じの人でしたか」

「若くてきれいな人だよ。おつかさんの介護に来ていたヘルパーさんさ。いつの間にか仲良くなったんだね。旦那さんとうまくいかなくて、しばらく隣の部屋に住んでいたんだよ。でもほとんど一緒にいたんじゃないのかな」

和彦は仰天した。女性の特徴を詳しく聞くと間違いなかった。朝倉が書いていた新井山あすか。本名は本条さおり、その人だ。

「亡くなったときは同居していなかったですよね？」

「そうなんだわ。急にいなくなった。これは噂だけどさ。朝倉さんには母親が残したお金が五百万くらいあったはずなの。これは直接おつかさんから聞いているから間違いない。私が

死んだら年金も出なくなる。少しでも貯めてあげようと思うと言つてた。節約に節約を重ねて、欲しいものも買わずにいたよ。たまに旅行するつたつて日帰りさ。そのお金があとたたもなく消えていたらしいわ。旭川にいる娘さんが大家さんに打ち明けていたのを私は小耳にはさんだのさ。私は余計なことと言わなかつたけど、あの女の人にあげたんじゃないかと思う」

そのとき、孫かもしれない男の子が老婆を呼びに来た。和彦は聞いたことに驚愕しながらしばらく立ちつくしていた。いつたい、何がどうなっているのやら。真実は分からない。

先ほど聴いた『冷たい夏』を口ずさむ。朝倉の心と体をあのマフラーが温めていたのはどうやら真実のようだ。しかし女がいなくなつてからの追憶はどれほど苦しめたことだろう。急に空は暗さを増した。月も星もまだ出ていない。

——今その輝きを空に見られたら、なかなか小説的なのだ。

そんな独り言をつぶやいて車に乗り込み、軽くアクセルを踏んだ。

完